

# 青雲の

題字は 窪田哲さん (1966年卒)

発行 大谷大学同窓会飛驒支部

住所 〒506-0857 高山市鉄砲町6

高山別院内

電話 0577-32-0688

FAX 0577-32-9552

## 大谷大学フェア(東海) 公開シンポジウム

### 「人が育つということ -地域・未来・つながり-」

2018年

# 7月21日(土)

16:30 ~ 18:00 一般来場歓迎・事前申込不要

※進学相談会を同日開催(14:30 ~ 18:00)

会場：岐阜商工会議所(岐阜市神田町2-2)

問合せ先：大谷大学校友センター(TEL/075-411-8124)

[www.otani.ac.jp](http://www.otani.ac.jp)

パネリスト

木越 康 大谷大学長

志藤 修史 大谷大学社会学部長

コーディネーター

平野 真 大谷大学同窓会飛驒支部副支部長

後援 岐阜新聞社 岐阜放送

## 大谷大学フェア開催

大谷大学在学生保護者・同窓生ならびに大谷大学に関心をお持ちの方々を対象とした合同企画です。

今回は、東海地区を対象に岐阜市を会場に開催されます。公開シンポジウムでは、飛驒支部副支部長の平野真氏がコーディネーターとして参加します。是非ご参加ください！

### ▼大谷大学夏季八十講／支部総会

年に一度のこの機会に、多くの同窓生の皆さまが旧交をあたため、また、現在の大学の様子をお聞きし、ご意見ご要望などいただきたいと思っております。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

日程 8月4日(土)

第一部 追弔会 午後1時～

第二部 講演会 午後2時～

第三部 総会 午後3時半～

第四部 懇親会 午後5時半～

講師 ロバート F. ローズ 教授(仏教学)

講題 浄土を求めて生きる—源信僧都の人間観—

尚 出欠のご返事を、7月25日必着で、同封のハガキにてお知らせください。また支部の年会費500円を地区役員までお納めください。

お悔み

杉野 明俊 氏 2017年6月14日寂

堀端町照蓮寺(1952年短期大学部卒業)

渡邊 修 氏 2017年12月31日寂

清見町藤瀬了因寺(1954年文学部卒業)

生前のご功勞を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

### ▼ご坊さま 夏の暁天講座

夏季八十講翌日の別院おあさじ後に、ローズ先生に引き続きお話いただきます。こちらにも是非お越しください。

日時 8月5日(日) 午前6時半

講師 ロバート F. ローズ 教授(仏教学)

講題 源信の救い—地獄・極楽・念仏—

### ▼本部キャンパス総合整備／新教室棟建築資金に関する御礼とご依頼

飛驒支部同窓生の皆さまには、母校のためにお心をお寄せいただき厚く御礼申しあげます。下記のとおり、募金の現状(本年4月末日現在)をご報告いたしますとともに引き続きご協力賜りますよう、お願い申しあげます。

飛驒支部依頼額 1,676,000円

募金総額 1,220,000円

※募金の期間は、2019年3月までとなります。

# 谷大の思い出

平野 一成（昭和三十九年三月 文学部哲学科卒業）

高山一組 本教寺前住職

学生時代を展望してみると、学校や授業の様子に、そして京都の町の情景がいろいろ思い出される。

校舎は赤レンガの「本館（尋源館）」が中心であった。中には本部と教室があつて、二階は講堂になつていた。体育館は古く、バドミントンが数面出来る程の、今考えとあまり広くないものであつた。すみには「うどん食堂」があつた。ただ図書館だけは立派であつて、奥の洗心学寮や体育部小屋などは古い建物であつた。それに北出口門にはパチンコ店があり、いつも賑わつていた。烏丸通りを挟んだグラウンドは建物も無く広々としていた。

鉄道は蒸気機関車で、市電は車掌が引く紐で鳴る鐘の合図でのんびりと動き出していた。その頃、一万円紙幣が発行（昭和三十三年）され、高額でとても驚いた記憶がある。また安保闘争（昭和三十五年）が起こり、全学連デモは羽田空港や国会にまで乱入して女子学生が死亡した。京都でも激しく活動が続き、烏丸通りのデモ行進に参加し、御所で大集会が催されたことを思い出す。

それに比べ、京都の学生生活は大変暮らし易く、街の牛乳屋やパン屋、八百屋ではツケがきいた。質屋では学生証も質草にでき、使用中の専門書までも質入れ出来た。友人の中には布団を質に入れ、汽車代を工面して自坊に帰った者もいた。

卒業証書には十七代学長 曾我量深とあり、宗門の歩みのなか谷大卒業生に深い願いがかけられた時期でもあつた。本山では「宗祖親鸞聖人七百回御遠忌法要」が厳修され、学生として参詣した。時の内局は訓覇信雄総長で、同朋会運動五ヶ年計画が条例公布され、同朋会館では本廟奉仕が全国より上山されていた。

大谷大学は六百五十回御遠忌法要執行の年（明治四十四年）の秋、真宗大学が真宗大谷大学と改称し、京都に移り、今、七百五十回御遠忌での立派な両堂修復があつて大学の願いも社会に応える人材養成がなされていくことであろう。

傘寿を迎えた今年、感慨無量で一杯である。

## 『燭火の陰』（編集後記）

大谷大学で事務職員としての仕事を始めて間もなく、若手の職員が集まり研修を受けた時のこと。

研修会の講師は、自己紹介もしないうちに「みなさん、キャッチボールのマネをしてください」と言う。いきなりのことに、若手職員は戸惑いながら立ち上がりに、各々がボールを投げようと振りかぶつた。その場にいた全員が、「投げる」ポーズをとつた。「受ける」ポーズをした者は、私を含め誰もいなかった。その後、「みんなが「受ける」ポーズをする世の中になれば素敵ですね」と、ご講師は言う。「伝える（投げる）」こと以上に、「聞く（受ける）」ことの大切さに気付かされた瞬間だった。

親鸞聖人は、ご自身を「愚禿（ぐとく）」と名乗られた。このお言葉は、決して魅力的で、流行的とは言えない。しかし、このお言葉は、聖人亡き後、長きにわたり考えられ、伝えられている。魅力的な言葉だけが伝わるのではないことに改めて気付かされるとともに、魅力や流行に惑わされることのない不思議な力強さも感じる。

今年から文学部に加え、社会学部・教育学部が加わり三学部体制となった大谷大学。学んだことを魅力的に社会に発信し、還元していくことが大学・学生・卒業生の大きな仕事のひとつである。一方で、学んだことに聞き続け、確かめ続けていく人材を育てることにも、仏教精神にもとづく大学の大きな役割ではないだろうか。

窪田 純